

内外交差点

そらとぶタクシーって？ 万博&空飛ぶクルマへの期待と課題

寶上 卓音氏 (そらとぶタクシー社長) 第1/12回

第1回を書き始める前に

まずは私達「そらとぶタクシー株式会社」(以後、ソラタク)とは何かというところを紹介いたします。

きっと読者の皆様には、「え？君たちが空飛ぶクルマを作ってるの？」「何をやっている人達なの？」「あれはヘリコプターとはどこが違うの？」などなど、空飛ぶクルマに関する疑問はたくさんお持ちであると思います。

単純に言ってしまうと、私達ソラタクは、航空会社という位置付けになります。いわゆる「航空運送事業許可を得たサービス事業者」であり、メーカーとしての活動はしておらず、空飛ぶクルマの機体を作る事はありません。

ではそもそも「空飛ぶクルマ」って一体なんでしょう？本紙の読者の方は国交省の管轄の話には詳しいですから、航空運送事業許可と聞けばピンとくる方もいるかもしれませんね？日本において空飛ぶクルマは航空機に分類されます。当たり前ですが、日本国内で空を飛ぶ乗り物はすべて例外なく航空機に分類されます。

では航空機なのに、なぜ空飛ぶクルマと言うのでしょうか？実はこの言葉は、経産省の次世代モビリティ制作室で生まれました。人に新しい移動であるというインパクトを与える言葉でありながら、一般的なクルマのように生活に溶け込み、当たり前かつ気軽に使えるようなイメージの言葉を目指したようです。まさに我々が目指すところであり素晴らしいネーミングです。

日本ではこの空飛ぶクルマという言葉が定着していますが、正式名称は「電動垂直離着陸型航空機」といいます。世界ではeVTOL (Electric Vertical Take-Off and Landing) とも呼ばれています。AAM (アドバンスドエアモビリティ：拡張版航空機) や次世代型航空機と呼ばれる事もあります。

空飛ぶクルマが従来の航空機からどう進化したか

たとえば、①垂直離着陸が可能②燃料が電気に置き換わる③無人操縦できる可能性がある——という3点になります。

その次世代型航空機とも言える空飛ぶクルマがどのように世界を変えていくのかは、次回お話しさせていただきます。

大阪・関西万博について

大阪の地元業者として、大阪・関西万博での空飛ぶタクシーの運用に大きな期待を寄せています。しかし、2020年代前半に万博のニュースとともに言われていたような方向性の商用モデル飛行は実現しないとも予測しています。機体メーカーの開発状況や認可の取得、あらゆる法整備の状況から鑑みて難しいと考えています。

私達サービス事業者自身も必ず万博で成功させたいというよりは、万博の後にしっかり空の道を作りサービス運用をして行きたいと思っています。

ショーケースで成功させるのは、一つの周知活動を行う上で大切なことですが、未完成で提供してしまうと、逆に民間の期待を失ってしまうことにもつながります。

私たちはソラタクは万博に参加せず、独自路線で歩むということを決定しており、2023年ごろから空の航路の構築を始めています。既に万博のニュースでもでておりますが、今回のお客様を乗せた飛行&ショーケースはできないとの判断になりました。

とはいえ、万博にむけて法整備が行われて来た空飛ぶクルマ業界の発展がさらに加速していく事は間違いありません。

第2回以降では、今後どのように空飛ぶクルマビジネスが展開されていくのか、それを通じて世界はどう変わっていくのか、というところをお伝え致します。お楽しみに。

